

事例③

建学の理念を現代に生かす リベラル・アーツ教育を展開

東京女子大学

東京女子大学は、「専門性を持つ教養人」の育成を目標に掲げ、キリスト教を基盤とするリベラル・アーツ教育を推進している。その根幹を支えているのが全学共通カリキュラムだ。キリスト教学や女性学などで構成される科目を幅広く配置することにより大学の特色を核にした、現代的文脈における教養教育を実現している。

学部統合で明確になった 教養教育のシステム

東京女子大学は、キリスト教に基づくリベラル・アーツ教育を標榜し、開学当初から教養教育に力を入れている。同大学が推進する教養教育は、専門教育に対する一般教養教育という意味合いではない。小野祥子学長は「専門性を修得すると同時に、幅広い視野を持った女性を育てていく。そのこと全体が教養であり、本学の教育全体が教養教育であると考えている」と語る。

こうした考え方を明確に示したのが2009年度の改革である。文理学部と現代文化学部を4学科12専攻から成る現代教養学部再編統合すると同時に、全学共通カリキュラムを導入した。狙いは、時代に合わせた教養教育の刷新、女子教育の意義の明確化、キリスト教主義教育の強化の3点にあった。学部統合によって、学部教育全体を広義の教養教育と捉えた上で、全学共通カリキュラムを狭義の教養教育と位置付け、幅広い視野の獲得をめざす教育システムを構築した。併せて、全学共通教育センターや全学共通教育部長のポストを新設した。

ところが、全学共通カリキュラムによる教養教育の成果は思うように上がらなかった。同大学では、以前から自己点検評価により改革の検証を行っているが、その結果からは次のような問題点が浮上してきた。学部統合により科目数は増加したものの総花的で、系統的な履修ができていない、自分の専攻に近い科目だけを履修する学生や、1年次だけで必要単位数を修得し終える学生が多い、いわゆる楽勝科目に一部の学生が集中している、などだ。

学生からも「科目名からは何が学べるのか分からない」「履修したい科目同士が、同じ時限に開講され、どちらかを諦めざるを得ない」との声が上がった。そこで2013年度、全学共通カリキュラムを全面的に改革した。

6領域を確実に学ばせる 総合教養科目を設置

この改革では、全学共通カリキュラム導入当初の3つの目的を確実に達成し、自己点検評価で判明した課題を解決することをめざした。まず、全学共通カリキュラムを「リベラル・スタディーズ」と、「アカデミック・スキル

科目」に大きく分類（図表）。「リベラル・スタディーズ」には、視野の拡張に資する総合教養科目とキリスト教学科目を、「アカデミック・スキル科目」には、大学での学問に欠かせないリテラシーとしての語学力や情報処理能力、日本語力などを高める科目を置いた。

とりわけ教育の基盤であるキリスト教学科目では、単に聖書を学ぶだけではなく、建学の歴史と建学の精神を織り交ぜながら講義するなど、キリスト教を身近に感じてもらうよう工夫している。「自分の大学の授業や環境のルーツを知る授業は学生からも高評価を得ており学ぶ姿勢もポジティブになったようだ」と小野学長は話す。

総合教養科目は何年次でも履修でき、10科目18単位を修得する。総花的とされた反省に立ち、現代社会を生きる上で不可欠な学びとして、「人間の知的生産」や「人間社会の仕組みと問題」など、学問分野を横断する6領域に分類した。重複する科目を削減し全体のスリム化を図った。一方で、日本語科目を設置した。専攻を越えて学べる演習科目や、海外教養講座も配置した。幅広い学びを促すため、すべての領域で2科目を必修とし、自分の専攻

に関する科目は、卒業要件の単位として認めない。1年次で全学共通カリキュラムの全ての単位を修得するような履修を避ける狙いである。

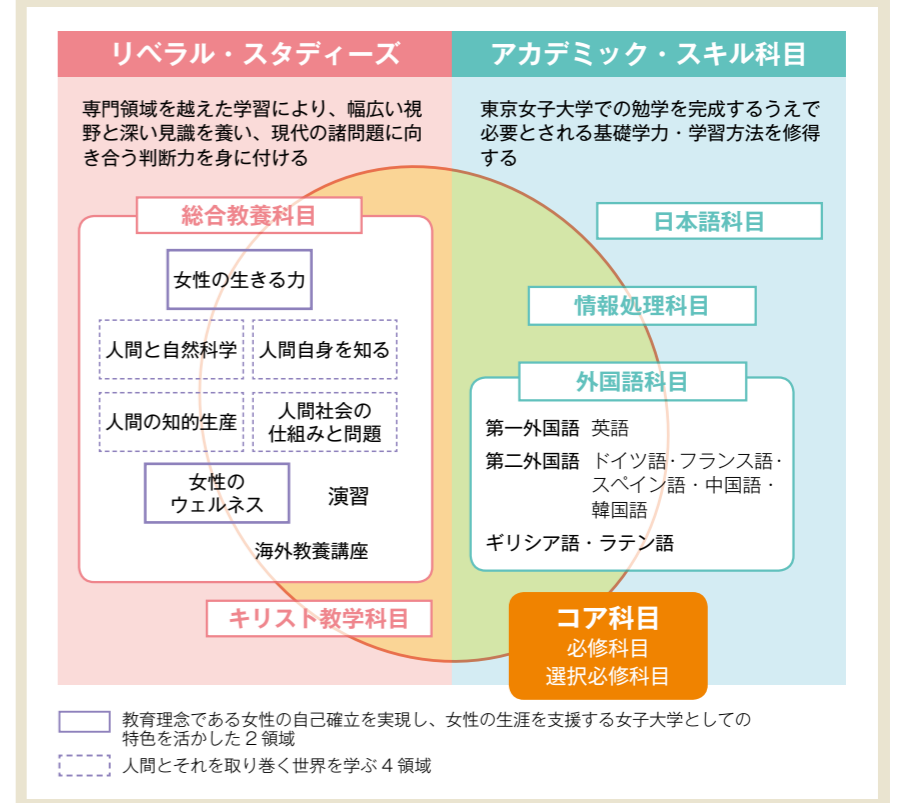
女性の自己確立の必要性を強く説く女子教育も、「リベラル・スタディーズ」の中に位置付けた。以前から多数開講されてきた女性学やジェンダー関連の科目を、総合教養科目の「女性の生きる力」「女性のウェルネス」の2領域に集中させることによって、女性としての生き方を学ぶことも教養の一部であると明確に示した。

「アカデミック・スキル科目」は、グローバル人材育成の視点から目的を明確にした。英語の必修科目は、入学時と2年次末に受験したTOFEL ITPテストのスコアを比較し、学習成果を可視化することにより、教育改善につなげている。

教員は自分の専攻の科目のみを担当するのではなく、他専攻の学生も履修する全学共通カリキュラムの科目も担当することで、自分の専門領域をわかりやすく、面白く伝えることにチャレンジする。そうすることにより教員だけではなく学生も学べる世界が広がる。そのために教員は教育の工夫が必要になる。加えて、総合教養科目はこれまで3分の1は非常勤教員が担当していたが、できるだけ専任教員が担当する方針をとった。

小野学長は「教員の反発も予想される改革だったが、自己点検評価に基づいた客観的なデータがあったため、さほど抵抗はなく受け入れられた。むしろ、多くの専任教員が関わることにより全学共通カリキュラムへの理解が進み、専攻の教員がその専門分野を学ぶ上で履修が望ましい科目について、学

【図表】全学共通カリキュラムの概要



生に助言するケースも増えてきた」と語る。

アセスメントを行い 教養教育の可視化に挑む

学生が履修しやすいように、全学共通カリキュラムのハンドブックも作成した。カリキュラムマップを明示し、全科目にナンバリングを施し、どの科目でどんな能力がつかのか、学生がきちんと理解した上で履修できるように工夫した。関心に応じた推奨科目も示し、履修の仕方についてのアドバイスも豊富に記した。小野学長は「教養を『学ぶことを学ぶ力』だと捉え、学生が主体的に自分の学びを組み立てていく力を育成することこそが教養教育だと考えている。その力は、卒業後も自

分の専門に拘泥せず、新しい分野を学び始められる力でもある。ハンドブックは、そうした自主的な学びを起動するためのツール」と説明する。実際、図書館の利用回数やインターネット上の学習教材へのアクセス数は以前よりも増加しており、学習意欲の高まりがうかがわれる。

一連の改革の検証も始めている。2014年度に選定された「大学教育再生加速プログラム」で、教養教育の成果を可視化する試みをスタート。客観的基準に基づいた可視化モデルを構築する計画だ。そのための専門職員も採用した。小野学長は「教養教育の成果を測定できる可能性が広がり、本学の次の改革につながるだけでなく、他大学の教養教育の構築にも貢献できるはず」と期待する。